

作物名：トマト

病害虫名：斑点病（病原：*Stemphylium lycopersici*, *Stemphylium solani*）



葉表の病徴



初期病斑



斑点病菌の分生子

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・主に葉に発生するが、多発時には葉柄、茎、果実のへたにも発生する。
- ・葉では下位葉から発生する。発生初期は小さな緑褐色で水浸状の斑点を生じ、症状が進むと拡大してまわりが黒褐色、中央が灰褐色でやや光沢のある2～3mm 円形病斑となる。病斑の周囲は黄変しており、さらに進展すると病斑の中心部に穴があく。
- ・多発時には多数の病斑が生じ、それらが融合して大型の病斑となる。下位葉から黄化し枯死する。葉柄や茎にも病斑を生じる。
- ・果実ではへたが赤褐色に変色して乾燥し、症状が進むと腐敗が内部へ進展し、離層部から落果することがある。
- ・育苗期～収穫期の生育時期全般に発生がみられるが、気温がやや低く湿度の高い条件で発生が多くなる。
- ・他の斑点性病害と比べて病斑は小さく、大型病斑に拡大することはまれである。
- ・抵抗性を有する品種ではほとんど発病しないため、病徴と抵抗性の有無は診断の目安となる。

2 伝染源及び伝染方法

- ・被害葉上で菌糸や分生子の形で越冬し、伝染源となる。
- ・罹病葉の病斑上に形成された分生子が、風によって空気中に飛散して伝染する。
- ・葉面に付着した分生子は、結露水等の水分によって発芽し、葉の組織内に侵入する。

3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は、糸状菌の一種で不完全菌類に分類され、分生子を形成する。
- ・菌の生育適温は25℃前後で、発病好適条件は20～25℃の気温と多湿である。
- ・気温15～35℃では、葉の濡れ時間が6時間以上で感染、発病する。
- ・施設栽培で発生しやすい。

4 防除対策

- ・抵抗性、耐病性の品種を作付けする。
- ・抵抗性等のない品種を栽培している場合は、発生初期に薬剤防除を行う。
- ・被害葉等は伝染源となるので、ハウス内に放置せず持ち出して処分する。
- ・施設栽培では、気温較差の大きくなる秋期には換気を行い除湿に努める。
- ・肥料切れは発生を助長するので、適切な肥培管理に努める。

5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）、農業総覧原色病害虫診断防除編2-①（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編2（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影